

発達心理学における「自分史」発表の教育的意義とは

勝浦 眞仁

KATSUURA mahito

本学の発達心理学の講義において実施した「自分史」発表の教育的な意義を示すことが本稿の目的である。「自分史」発表とは、いま青年期を生きている学生たちに、これまで生きてきた過程の中から印象に残る体験を振り返り発表することで、その発達の意味を講師と学生とが共に考察しようとする試みである。40名の受講生のうち12名が発表することを希望し、そのうち11名が先生をテーマとして選んだ。その中から4名の【発表内容】、【発表者の感想】および発表を聞いた【学生の感想】を取り上げ、筆者が【コメント】を記すことで、短大学生が抱えている「先生像」に迫った。

その結果、「自分史」発表には(1)プレゼンテーション能力を伸ばす契機となり、(2)同級生の多様な「先生像」を知る経験を提供し、(3)学問上興味深い知見を生み出す可能性を生み出すという3つの意義とともに、評価基準や発表テーマの設定に関する課題も明らかになった。

キーワード：自分史、先生像、発達心理学

1. 問題(目的)

昨今、大学および短大において授業の改善に向けた様々な試みが行われるようになってきており(赤堀,1997;伊藤・大塚,1999)、教員間で授業改善という共通の問題意識を持ち、授業に関する知識を共有化していこうとする動きが活発になってきている(西浦・松原,2004)。

こういった授業の改善を目指す動きの背景には、講義という形式の問題点があり、一方的な情報の伝達になりやすい傾向にあることが一因として挙げられる(古澤・小島・塚田・酒井,2006)。講義という授業形式でありながらも、受講生の学習動機を高め、彼らが主体的に参加し考えあう授業をいかに展開していくのかという問題に、我々は取り組んでいく必要がある。

筆者は発達心理学の講義を担当する立場として、受講生の学習意欲を高めるために、次の2つのことを目標に挙げている。1点目は「発達心理学の主要な理論および保育・教育現場の実践を紹介することで、子ど

もの発達・成長をさまざまな角度から理解すること」である。

本学の児童教育学科は保育士を目指している学生が多く、「人間はどのように変化していくのか、何ができるようになるのか」といった問いに、加齢に沿った基準を示す発達心理学は、保育実習において役立つものが多い。すなわち個体能力発達の観点から、年齢相応な行動および働きかけを行うための理論がこれまで集積されており、それを教授していくことは、保育士養成を目指す短大の教育上必要である。

しかし最新の発達心理学は次にあげる3つの潮流に沿って変遷してきている(古澤・小島・塚田・酒井,2006)。

3つの潮流とは第1に、発達を生から死までにいたる「生涯発達心理学」の観点から捉えることで、人の生を現在の時点に限って理解するのではなく、より長い時間的経過から捉える観点が問われるようになってきたこと。第2に生物学的身体を持つ存在であると同時に、社会文化的存在である人間の発達を考える上で、親子関係や教師-子ども関係など、人と人との「関係

性」を捉える観点が必要になってきたこと。最後に発達心理学は、日常生活の中で営まれている人の生に目を向け、どのように変容していくのか、その発達の事象を捉えようとする「生活密着型」の学問であるということが意識されるようになってきたことの3点である。

これら3つの観点から子どもの発達を考える姿勢を身につけてもらえるよう、「自分自身がこれまでどのように育ってきたのか、発達してきたのかを内省することで、自己および周囲の人々（親・教師・友だち）に対する洞察を深めること」を2点目の目標に挙げている。この目標を達成するためにはどのような授業運営が求められているのだろうか。

これまでも「生活密着型」の学問である特性を活かして「受講生に身近に感じさせるテーマの問題解決を通して、人間の発達に内包される原理や理論を文字通り修得してもらう手段を工夫すべき」（日本発達心理学会,1996,1998,2001）という提案がなされ、授業の工夫がさまざまになされてきた。

具体的には集中講義という授業形式にすることで、学生間の話し合いの時間を設け、グループワークを行ったり（佐藤,2007）、ディベートを導入し、学生のプレゼンテーション能力を高めたりする実践例（中澤,2000）が報告されている。

ところで受講生にとって身近に感じる発達心理学のテーマとは一体何だろうか。受講する学生の多くが短大に入学したばかりの1年生で、お互いのことをあまりよく知らないまま当初は過ごしているが、夏休みに近づくにつれ、授業での活動やサークル、バイト等を通してさまざまな経験をし、友人関係も出来上がってくる。中学・高校の頃（思春期）よりも視野が広がり、徐々に就職が現実のものとして差し迫ってくるこの時期は、子どものままではいられない現実を突き付けられ、社会の一員としてこれから生きていくことを意識することになる。

まさに今、青年期を生きている学生たちに、人の一生の中で、思春期や青年期とはいったいどういう時期なのかを考えてもらうことは、発達心理学において大いに意義があるように思われる。すなわち自己を内省することを通して、例えばなぜ保育士になりたいのか、なぜ反抗期があったのかなど、受講生自身が抱える問いに突き当たり、それを発表することで、実は同級生も同じ悩みを抱えていることに気付いたり、またアドバイスをもらえたりする機会を持つことができる。受

講生にとって身近な問題を立ち上げ、講師がその発達心理学的な意義を示す授業を運営することを目指して、自分の生きてきた過程の中で、印象に残っている出来事を振り返る「自分史」発表という講義を本学において実施した。

授業の改善に寄与する取り組みとして、「自分史」を取り上げた実践研究はこれまで報告されていない。そこで本学で実践した「自分史」発表の教育効果および発達心理学教育上の意義を考察していくことが本稿の目的である。

2. 方法

調査期間：平成21年7月15日、31日（第13講～第15講）

調査対象：夙川学院短期大学児童教育学科1回生36名、2回生4名

手続き：発表趣旨を説明し、自分自身のことについて発表することを了承できる希望者を募った。今回の講義では40名の受講生のうち12名の了解が得られた。

発表するテーマは、青年期特有の課題があると考えられる①親、②先生、③友だち、④異性、⑤進路の5つのテーマを挙げた。今年度の講義では12名のうち、11名が②先生、1名が①親をテーマとして選択した。保育士、および小学校教諭を目指す学生にとって、先生というテーマは興味深いようであった。そこで本稿では先生をテーマにした学生の中から4名の発表を取り上げ、彼女たちが持っている「先生像」を探った。

それぞれの発表において、自分自身や自分の周りの人の体験を踏まえて、一人につき10分の発表時間を設けた。発表してもらった後に、発表を聞いた受講生とのディスカッションの時間を設け、質問に応じてもらった。また講師である筆者自身も発表に対して質問をし、発達心理学的な観点からコメントをした。

受講生からの質問がない場合は、感想を用紙に書いてもらい、発表終了後、発表者に手渡した。また発表者自身にも発表をした感想を用紙に書いてもらい、講義終了後に受講生の感想とともに回収をした。また後日、発表者には発表した内容をレポートとして提出を求めた。

評価は提出レポートと発表態度によって、A・B・C・Dで評価した。これは期末の総合成績の点数に加味した。

こういった手続きを踏んだ上で「自分史」発表に取

り組んだ。本紀要に発表内容を掲載することを発表者に了承してもらった上で、本人の所属学科と学年を記載し、提出レポートをもとにした【発表内容】を記述、内容が伝わりにくい部分については修正、補筆した。また発表終了後の【発表者の感想】と【学生の感想】を掲載した。ただし【学生の感想】については、すべてを掲載すると膨大な量になるため、類似の意見をまとめるなどして、一部の抜粋にとどめた。

それぞれの発表に対して、講師である著者がその場で【コメント】を加筆して、それぞれの発表に対して記した。まず発表者の様子や、発表時のクラスの様子、また筆者が発表者にした質問等を挙げた上で、それぞれの発表が発達心理学においてどのような意味があるのかについても記述した。

以上のような掲載形式をもとに、4名の「自分史」発表、特に彼女たちが持っていた「先生像」について展開していった授業について記す。

3. 授業の展開と考察

<発表1> Kさん(初等教育学科1年生)

【発表内容】「可能性を広げてくれた先生」

小学校から高校生までを振り返ってみたとき、私にとって先生という存在は「道を切り開いてくれた人」でした。

小学校4年生までは学校が面白くなくて嫌いでした。給食の時間から登校して保健室等で過ごし、時間になればすぐに帰るという生活で、毎日「どうでもいい」と感じながら過ごしていました。

しかし小学校5年、6年の時に出会った担任の先生はとても好きな先生でした。いろいろとスポーツを教えてくれて、学校も楽しくなりました。それがきっかけとなって、スポーツの強い学校に行きたくなり、小さい頃から習っていた空手の道場の先生の勧めもあって、受験勉強も頑張った結果、希望する中学校に入学することができました。

中学校に入ってから休日もなく、空手に明け暮れた毎日でしたが、小学校の時は全然勝てなかったのに、中学からは全国大会に出場できるまでになりました。そのとき出会った空手部の素晴らしい監督のおかげで、精神的にも技術的にもすごく成長することができ

たと感じています。

その監督には厳しい指導を受け、空手という競技ゆえにですが、歯を折ってしまったこともありましたが、もうやめたいと思ったり、先生に反抗したりする気持ちもあったのですが、むしろ叱ってでも強くしてくれたことにとても感謝し、その先生に憧れ、先生の行っていた大学を目指そうと思い、また新たな目標が生まれました。

その後高校を卒業し、空手の先生の大学に4年間通いましたが、小学校教諭を目指すという新しい目標を見つけ、短期大学に入学することにしました。そのときにも高校の先生方に協力していただき、私の高校は恵まれた環境にあったことを再認識しました。

こういった経験から私にとっての先生とは、可能性を広げてくれる大切な存在です。

【発表者の感想】

どんな風に伝えたらよいか分からず、とても緊張しました。自分が伝えたい事を前に出で、人に伝えるって事は難しいと感じました。言いたいことはたくさんあるのに言葉に出すのが難しかったです。

【学生の感想】

- ・ 良い先生に恵まれたら、学校が楽しくなるし、人は変わると思えた。
- ・ 先生の厳しい指導や大学を出てから改めて短大に入学したことなど、かなりのものを乗り越えてきたのは本当にすごい。
- ・ 好きになった先生はどんな先生なのか、なぜやる気が湧いたのか、いまの先生とのつながりなど、もっと知りたいと思った。
- ・ 先生の影響は大きいし、先生が積極的なら生徒も先生のことを好きになってくれると感じた。

【コメント】

「自分史」発表のトップバッターになったKさんはゆっくりとした口調で、1つ1つの出来事を丁寧に語っていた。そのおかげで発表も分かりやすく、その時の情景が容易にイメージでき、聴いていた学生にとっても心に残る発表であった。

発達心理学的観点からもKさんの発表には、豊饒な意味があるように思われる。尊敬する先生を振り返ることを通して、「自分の可能性を広げてくれたこと」にKさんは気づいたが、小学校のときに学校へ通えな

い状態にあったことからすると、これは大きな心的な変化であった。

発表後になぜ小学校に行けなかったのかについて質問したところ、「仲良くなれない人が同じクラスにいて、会うとケンカしてしまうから行きたくなかった」と答えた。さらにその時の先生やクラスメイト、また両親も何か働きかけをしたか尋ねてみたが、Kさんは首を振り「してくれたと思うけど、(その働きかけを)拒否していた」とのことであった。

小学校のときに友だちができるかどうかは、子どもたちにとって大きな意味をもち、日々の学校生活の張り合いも変わってしまうことだろう。Kさんの場合は友だち関係において何らかの衝突、躓きがあったようで、学校に来られないほど、心に大きな負担となる事であったようだ。

しかし5・6年生の担任の先生がスポーツを通してKさんの心を開こうとした。学生の反応にあるように、いったいどのような先生だったのか、より詳しく発表してくれれば「先生像」に関する考察は深まっただろうが、「可能性を広げてくれた」と感じる背景には、Kさんを受けとめてくれる「居場所」を作ってくれた先生の存在は大きかったのではないだろうか。つまり、学校に「居場所」を見いだせなかったKさんにとって、Kさんを認めてくれる人がいるからこそ、Kさんは安心して中学・高校生活を過ごし、前向きに目標を見出していけるようになっていった。

Kさんの発表はいま、不登校など学校教育の諸問題を考えていく上で、「居場所」の大切さを改めて認識させてくれた発表であった。

<発表2> Iさん(初等教育学科1年生)

【発表内容】「いい先生って何？」

先生とはよくケンカしていました。とりあえず最初の授業で声を出して少し授業の邪魔をしてみたり、物を投げてみたりしたこともありました。そのときの先生の反応を見て、いい先生か自分に合わない先生かが何となく分かってしまうんです。

そういったことをきっかけにして、先生とは友だちのような間柄になっていくことができました。ちょっとした相談相手の1人になって、気さくに話していく中で信じられる人、頼りになる人を見つけていけまし

た。

相性の悪かった先生の前では、勉強を苦手と感じていたことも手伝って、授業中いたずらをしたり、はむかったりしていました。そのため友だちのような間柄の先生にさえ叱られることはありました。それはいい先生と信じていたこともあって受け入れることができませんでした。また時には、ほめてくれることもあって、そこで自信を持てた気がします。

私にとって先生とは、親友のような間柄になれる人のことです。

【発表者の感想】

これまでを振り返ると、私の先生はいつも忍耐力がすごいと思いました。

【学生の感想】

- ・ ケンカしながら仲を深めていく関係はびっくりしたけれど、先生も本人もやんちゃでそういうのもいいと思った。
- ・ 先生は大事な存在であることは伝わったけど、物を投げてはいけぬ。言葉で伝えたら分かってくれると思う。
- ・ 先生がどんな先生で、どういう態度で距離を縮めたのか知りたかった。
- ・ 先生に助けられていることが気付かないうちにあったので、なんかいろいろな気持ちが分かった。

【コメント】

Kさんの次に話したIさんの発表には驚かされ、また興味深いものでもあった。Iさんは原稿を書いたわけではなく、当時を思い出しながら自分の思いのままに話していた。普通の授業中でもどんどん自分の意見を出してくれるIさんであったが、発表中は顔を下向き加減でやや恥ずかしそうにして、少し投げやりな感じで話しているところにもIさんらしさを感じながら、筆者は発表を聞いていた。

まず初対面で、いきなり物を投げられたI先生の心の中はいかなるものだったのだろうか。当然教師が叱るものと思ったが、そのときのIさんをしっかりと受け止めようとしていた先生の姿勢はなかなか興味深かった。

発表全体を通して、Iさんにとって親友のように感じられる、頼りになる先生と頼りにできなかった先生との違いはいったい何だったのかと疑問に思い、Iさ

んに質問をしてみた。すると「うーん、なんとなくです。」とあいまいな返事で、Iさん自身の直感によるところが大きかったのかもしれないと思わせる答えであった。

しかし筆者としては釈然としなかったので「そうか、じゃあどんな基準があったのかな。仲良くなれた先生とそうじゃない先生とのあいだには。」と言葉を変えて質問してみた。するとIさんは物思いにふけた。こちらが少し待っていると「あっ！」とIさんは手を叩きながら突然言って「まず意見を聞いてくれる人。」と自分でも納得したいような表情を私に向けた。「ということ、先生の欲求を押し付けてくる先生は苦手だったってことかな。」と尋ねると、Iさんは大きく頷いた。

Iさんは中学から高校にかけて反抗期にあったようだ。彼女自身「今も反抗期です。」と笑いながら言っていたが、何らかのメッセージを大人に伝えようとしているかもしれない。素直に自分の思いを伝えるのが苦手で、先生に何らかの反抗をした形で、自分を表現しようとしていた。反抗期にある子どもの心性の一面を当時の自分の思いを辿りながら、Iさんは語っていた。

その自分の表現を受けとめてくれる人、その声を聞くようにする人にまず安心感を覚え、そこに素直な自分を表現していくようになっていったようであった。先生とは勉強を教えるだけの存在にとどまらず、一個の主体として学生の前に立ち、学生たちを受けとめようとしていることが、反抗期にある子どもたちにとって必要であることを示している発表であった。

<発表3> Yさん(幼児教育学科1年生)

【発表内容】「尊敬するコーチの言葉」

私には尊敬する先生がいます。それは高校2年生のときに出会ったバスケット部のコーチです。

私は初心者だったのですが、入部した高校1年生のときは外部のコーチしかおらず、走ることばかりで、試合も初心者だからとなかなか出させてもらえませんでした。そのコーチはバスケの上手い下手に関係なく、経験者を優先的に考える人で、先輩も(試合に)出られなかったと言っていました。私は納得いかずに1年間ルールさえ分からないまま過ごしました。

そして2年生になりコーチが変わりました。前の学

校ではインターハイに出場させた先生で、審判の副会長もしているすごい人でした。でも私の学年はその頃も走ってばかりで、他のことを教えてくれないコーチを好きになれず、バスケさえも嫌いになりかけていました。とても不安定で、仲間とのけんかも絶えない、先輩ともうまくいかない時期でした。

新しいコーチは説明が多く、礼儀に厳しい人でした。指導のやり方も独特で、あまりにチームの出来が悪いとその日の練習を中断して、コーチが帰った日もありました。私はそのやり方についていけず、どんどんコーチが嫌いになりました。

そんな中、コーチは私を特訓チームに入れてくれました。メニューが多くなるし、しんどいことも多いけど、楽しくて充実していました。でもそのうち同期の経験者に気を遣ってしまい、試合に出るたび申し訳ない気持ちになり、手を抜くようになりました。

ある日コーチに呼び出され「お前は技術があるのに頑張らない」と言われました。その次の日、特訓チームから外されてしまいました。悔しくて仕方ありませんでした。そこから気持ちを切り替えて引退まで一生懸命頑張りましたが、結局特訓チームには上がれませんでした。

今でも後悔はたくさんあります。「何であのとき気を遣ったんだろう」と考えてしまうときがあります。しかし今考えると、精神的に強くなれている自分がいて、頑張り方を学びました。バスケも心から好きになりました。あのときのコーチの言葉がなかったら、気付かなかったと思います。

私は厳しい時には厳しく、たまに冗談を言って笑わせてくれるコーチを尊敬しています。

【発表者の感想】

作文を読まずに自分のしゃべり言葉で発表しました。でも逆に自分のいいたいことが言えたので、すごくよかったです。一人一人、先生に対しての思いが違って、いろんな意見が聞けていいなと思いました。

【学生の感想】

- ・ 厳しい先生であっても、筋が通っていると、ほんとうに伝えたいことは必ず伝わるし、子どもを想っている事も伝わると思っています。私も思い出に残る先生でありたいです。
- ・ 発表された先生は先生のあるべき姿だと思います。

す。

- ・ 発表内容が分かりやすく、話し方も聞きやすく、よかったです。その先生がどんな先生なのか伝わってきたし、その先生によって、自分がどうだったのか、どうなったのかが分かりました。

【コメント】

発表者の感想にもあるように、Yさんは発表の下書きを時折見る程度で、クラス全体に語りかけるようにし発表していた。とても明るくはきはきとしていて、笑顔で話している様子に、聴いていた学生も引き込まれていたようであった。実際、発表に対する好印象の感想が多数寄せられていた。

しかし発表の内容はYさんの明るい口調とは対照的に、高校時代の自分を厳しく問い直しているものであった。コーチの「頑張らない」という言葉はYさんだけでなく、発表を聞いていた筆者にとっても大きなインパクトがあった。このコーチの言葉はYさんの周りの部員に対する気遣いを見透かしていたかのようである。そして2度と特訓チームに上がることがないという厳しい態度をとっていた。ここでYさんが挫けてしまわなかったところが本発表で興味深い点である。

高校1年生から高校2年生にかけて、Yさんにとってバスケ部の練習内容や指導に納得のいかない状態が続いていた。気持ちのやり場がなく、Yさんの言葉にあるように「不安定」な状態が続いていたようで、仲間や先輩とのすれ違いもあったようだ。自分の目指していた理想の自己像と現実の自分の姿との隔たりに苛立つものの、どうにもならない状態にある、思春期の子どもらしい悩みを抱えていたようだ。しかし、そのときに特訓チームに入れたことはYさんの気持ちに張りを生み、一時的にでも充実した気持ちになれたようであった。

一方、ハヴィガーストの青年期の発達課題にあるように仲間関係の形成という大きな課題もYさんには大きいのしかかってきたようで、仲間を気遣ってしまうあまり、コーチにその消極的な心理を指摘され、チームから外されてしまった。ここでYさんがバスケ部を辞めずに、もう一度一生懸命取り組んだところがYさんの発達の変容として重要なところである。

一生懸命になれなかった自分に対する後悔を抱えて生きていくこと、たしかに部活動という生活の一部の中での出来事ではあるが、そこであきらめなかったことは、今のYさんにとって大きな成長だったのだろう。

その悔しい体験を通して強くなった自分に気づき、逆に自信を得たからこそ、Yさんにとってコーチの言葉は深く心に刻まれていくことになった。

思春期から青年期初期にかけての複雑な心理を考えていく上で、豊饒な意味を考えることのできる内容で、まさに教師と生徒との「関係性」をもとに自律的な一個の主体へと変容していったYさんの発達過程が感じられた発表であった。

<発表4> Rさん (初等教育学科1年生)

【発表内容】「子ども目線の校長先生」

私が尊敬しているのは、小学校・中学校のときの校長先生です。私の行っていた学校は小中一貫校で、9年間校舎は変わりません。

私が小学校3年生のときに着任した校長先生で、前任の校長先生に比べると、みんなと一緒に行動することを基本にしている人で、昼休みには全教室を回ったり、生徒と一緒に遊んだりしていました。

校長先生は私の良き相談相手でもありました。中学2年から進路を決めないといけなくて、担任から早く決めろとよく呼び出しされていたときに、校長先生と一緒に進路を考えてくれたり、専門保育のある学校を探してくれたりもしました。夢を叶えるために高校から保育を学べたのは、校長先生がいてくれたからです。

今も時間があるときに母校に帰ると、昔と変わらず笑顔で話を聞いてくれます。勉強の相談をすると「お前はやる気がないし、勉強するのは苦手な方だから、無理じゃないか」と真剣なのか冗談なのか分かりませんが、言われてしまいます。ずっと私の成績、勉強態度を見ているからこそ言い切れるのでしょう。

先生はもう65歳手前ですが、きっと何歳になっても、自分のことより子どもたちのことを一番に考える、いい校長先生でいてくれるでしょう。

【発表者の感想】

校長先生とは今でもほんとに仲良くしています。先生と話すときはとても安心感があります。発表は多少緊張したけど、まざまざできてホッとしています。

【学生の感想】

- ・ 校長先生いいなあ。9年間変わらないってすご

い!

- ・ 校長先生の話がまとまっていて、聞きやすかったです。
- ・ 今でもいい関係が続いている人がほとんどで、いいことだと思いました。
- ・ 進路に関して、心から相談できた人がいないので、すごくうらやましいです。

【コメント】

現在、小中一貫校を導入し、また実際に運営しようとする地域も増えてきている中で、Rさんは小中一貫校出身ということで、彼女がその学校に対してどのような印象を持っているのかは興味深いものであった。また他の発表者が担任の先生や部活動の先生を中心に発表していく中で、校長先生に関する発表をしたのはRさんだけで、オリジナルな発表であった。発表している様子からしても、校長先生のことを話すのはうれしそうで、親身に相談に乗っていた校長先生との間に信頼関係が出来上がっているようであった。

これは従来の教育の在り方からすると画期的なものである。というのも、小学校の校長先生が卒業生の中学卒業後の進路について相談できる機会が、これまでの教育ではありえただろうか。また研究の俎上に上がることはまずなかった。これも小中一貫校という特性を生かした進路指導であり、Rさんにとっても安心して相談していける教育システムになっていったようである。

昨今、小学生から中学生になった際に起こる環境や人間関係の変化に対応できず、いじめや不登校が中学1年生において急増するという「中1ギャップ」という現象が世間で取り上げられているが、Rさんは校長先生をはじめとする先生方の支援体制が整っていたようで、そういった問題とは無縁であったようだ。

小中一貫校で育ってきた子どもたちがどのような発達変容過程を辿ってきたかを縦断的に分析することは今後の教育心理、または発達心理学上の研究課題の1つとして挙げることができる。

また進路の問題は中学生の発達心理を考える上で、重要な問題である。それまで保護者に守られながら、また教師による指示を与えられることで生活していた面が大きかったが、いよいよ子どもたちが主体となって、自ら進路を選んでいくことが求められ、また受験を通して進路の岐路に立たされる経験をする。その時に周囲の大人はその子が挑戦している姿を見守り、支

えていくしかない。

そういった状況の中で、小学校の校長先生が自ら進路の相談に乗ってくれたことはRさんにとって大きな支えになっていた。そしてその結果、本人にとっても納得できる進路選びができたようであった。

進路という人生における岐路に立ったとき、本人の主體的な判断が求められるのだが、それを支える先生の存在が重要であり、共に悩み、動くアクティブな姿勢の大切さを示す発表であった。

<授業を通してのまとめ>

本稿では発表してくれた12名全員の内容を取り上げることができなかったが、それぞれが非常に豊かな発達の意味を感じさせる内容であり、「自分史」発表という講義の試みを生かすのに十分なものであった。最後に発達心理学の教育における「自分史」発表の意義について3点言及する。

【「自分史」発表をする意義】

(1) プレゼンテーション能力を伸ばす契機となる

保育士を目指す学生にとって、自らが経験した出来事の様子や、自分自身の考えや思いを他者に伝えることは、保育実習における報告において必須である。幼稚園、保育園において、保護者にその日の子どもの様子を具体的に伝えることができるかどうかは、将来的に求められるプレゼンテーション能力である。

そこでまずは自分自身の体験を語ることができるかどうか、学生自身の「自分史」を発表することで、自分の考え・思いを伝えることがいかに難しいか、そこでいかに発表をすればよいのか、また言葉の大切さを知る契機になったという意義がこの試みにはあった。

発表1のKさんの感想に「言いたいことはたくさんあるのに言葉に出すのが難しかった」とあるように、自らの体験を言葉で表現することがいかに難しいかをKさんは実感したようで、「自分史」発表を行う1つの意義であった。

一方発表3のYさんのように発表慣れしている学生もおり、原稿を見ることなくクラス全体に語りかけるようにして全体を引きつける発表ができたことは、他の学生にとっても参考になったようであった。

今後は個人の発表だけではなく、グループで発表す

る形式も取り入れ、発表者同士が話し合いを重ねるとともに、互いに批評し合うことにより、学生自身によるプレゼンテーション能力の育成が期待できる。

(2) 同級生の多様な先生像を知る経験となる

本稿では4名の発表のみを取り上げたが、発表した11名それぞれの学生の「先生像」は実に多様であった。学生の感想を見る限りにおいても、さまざまな先生がいたことに気付かされ、先生のあるべき姿とは何かを考えた学生が多かった。

将来保育士または小学校教諭という立場になるであろう学生たちにとって、これまでの学生・生徒という「教えられる」立場から、教師・先生として「教える」立場へと変容していくことへの意識づけができたことは、「自分史」発表の意義であった。

発表2のIさんのように、反抗期の複雑で繊細な時期になる生徒に対して、いかに関わるのかは考えさせられるものであった。学生の感想もI先生に対して好意的なものから、対応として甘いのではないかといった意見も見られ、自らの「先生像」という価値観、先生のあるべき姿と思っている姿に気付くことができたようであった。また発表4のRさんが紹介した校長先生のように、アクティブな校長先生像は、ほとんどの学生が持っていなかった校長先生の姿であり、「先生像」の幅、視野を広げることにつながったようだ。

(3) 学問上興味深い知見を生み出す可能性がある

4名の発表内容にはそれぞれ発達心理学上の豊かな意味があった。発表を振り返ってみても、「居場所」・「反抗期」・理想の自分と現実の自分との「隔たり」・「仲間」・「関係性」・「小中一貫教育」・「進路」といった幅広く、思春期・青年期にある学生にとって身近な問題であるとともに、発達心理学上も意味があるテーマを学生たちが発表していた。

それぞれの発表によって、「居場所」とは何か、「反抗期」がある意味とは何か、思春期の子どもはなぜ「仲間性」を求めるといった既存の概念を揺らがすものであったと同時に、「小中一貫教育」というこれまでに発達心理学では十分に取り上げてこれなかったものに焦点を当てることもでき、我々としても学問上の知見を生み出していける可能性がある。

また同年齢にある受講生たちの体験が学問上に位置づけられることを通して、講義という形式とは違う角度から発達心理学の知見をより深く、身につく形で理解することができる。これは「自分史」発表の最も大

きな意義である。

こういった発表をきっかけとして、学生が発達心理学に興味を抱き、学習動機を高め、自ら文献を求めていくように授業を展開していくことも可能性もありうる。

以上の3点が「自分史」発表の教育的意義である。次に「自分史」発表の課題を2点述べる。

【「自分史」発表の課題】

(1) いかに評価するのか？

「自分史」発表はどのような基準で評価されるものだろうか。ゼミ形式の授業であれば、発表をしたことで合格とする基準もあるだろうが、講義という形式である限り、基準を設け、点数化する必要がある。今回の講義では発表態度および発表内容がどれだけ具体的に述べられているかで評価し、期末の総合成績に組み込んだ。

そもそも彼女たちの経験してきた発表内容は唯一無二のものであり、講師側が評価できるものではない。その内容を重視したいものの、発表態度といった表面的なところで評価せざるを得なかったことが課題である。

改善策としては、発表は講義の後半で行うので、それまでの発達心理学の講義と連動した発表ができるような工夫ができる可能性がある。例えば発表テーマを選んでもらった際に、それまでの講義の内容をまとめてもらう、またはテーマに関連する文献を紹介し、その内容を整理してもらった上で「自分史」を発表してもらうことを挙げるができるだろう。そうすることで、発達心理学の内容を理解できた上で発表できているかどうかという基準が生まれ、評価基準をよりクリアにすることができるかもしれない。

(2) テーマをどのように設定するか？

今回はテーマに偏りがあったことは否めない。先生というテーマではなく、親をテーマに発表した学生は1名だけで、友だち、異性、進路といったそれぞれのテーマについては、興味はあったのかもしれないが選択されなかったことが課題となった。これは保育士や小学校教諭を目指す学科ゆえに、「先生」というテーマに興味・関心があったがゆえの偏りであったのかもしれない。なぜそのテーマを選んだのかについて意見を聞く機会を設けることも必要であった。

「先生」というテーマに偏ってしまったために、類似した発表があった面は否めず、聴講する学生が飽き

気味になってしまい、集中力を保つことが難しくなってしまう面もあった。また逆に「親」をテーマにした学生の発表では新鮮味があったのか、学生がよく聴いている印象があった。

思春期・青年期の発達心理は「先生」だけでなく、さまざまな面から考えることができる時期である。できるだけ多様な観点から「自分史」発表ができるように、テーマの提示に工夫をする必要がある。もしくはテーマを設定しないことも選択肢の1つとして考えられる。より多角的な観点から「自分史」発表ができるようテーマを設定することが今後の課題である。

以上、考察として「自分史」発表の意義と課題について述べてきた。まだ講義として不十分な点もあるが、学生たちの発表内容は単なる出来事の羅列に終わることなく、アクチュアルな体験世界をそれぞれの言葉で語ってくれた。受講生の体験世界に迫る講義を展開できたことは、発表を引き受けてくれた12名の学生たち、特に本稿で紹介した4名たちの積極性によるところが大きく、感謝申し上げる。また聴講した学生たちも発表に対して、さまざまに意見を返そうとする姿勢には感動を覚えた。

今後とも保育や教育についての興味が深まり、保育者および教師として大成していくことを願う。

4. 引用文献・参考文献

- 赤堀侃司 (1997) ケースブック 大学授業の技法 東京：有斐閣。
- 伊藤秀子・大塚雄作 (1999) ガイドブック 大学授業の改善 東京：有斐閣。
- 古澤頼雄・小島康生・塚田一城 みちる・酒井由紀 (2006) 心理学部における発達心理学教育 (2002～2005年度) の歩み—講義者の試みを受講生はどう受けとめたか— 中京大学 心理学研究科・心理学部紀要第5巻 第2号, 1—21
- 中澤潤 (2000) デイバートによる発達心理学授業の改善 千葉大学教育実践第7号, 25—42
- 日本発達心理学会編 (1996) 特集：発達心理学をどう教えるか ニューズレター第17号, 2—10
- 日本発達心理学会編 (1998) 特集：発達心理学をどう教えるか (2) —このテーマにこの本・ビデオ・事例・電子化への対応— ニューズレター第25号, 1—13

日本発達心理学会 (2001) 特集：発達心理学をどう教えるか (3) —心理学専攻外の学生を対象として— ニューズレター第34号, 4—13

西浦和樹・松原勝敏 (2004) 研究授業「発達心理学I」の実施：高松大学紀要, 42, 139—156

佐藤公代 (2007) 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 (10) —「教育心理学特講」(生涯発達心理学) の集中授業の授業評価について—：愛媛大学教育実践総合センター紀要, 25, 117—122

<ピアスーパーバイザーのコメント>

受講生とは距離のある資料中の事例を読んでもらうのではなく、実感できる存在である同じ受講生の体験を生の言葉で聞いてもらうことは、聞く者に非常に強い印象を与えるでしょう。その後学問的な見地からその発表内容を分析し、提言をするという方法は、生々しい現実の事象から、抽象的な学問的理解に導き入れる課程において、印象が強いが故に興味も理解への意欲も増すと思われます。

受講生に授業に意欲的、積極的に参加してもらうのに大いに効果を期待できる方法を示唆して下さいます。

また、小、中、高課程における生徒と先生の関わり合いを個人の具体的な体験を通して知ることができ、短期大学においても、学生に単なる受講生として対応するのではなく、全人格的に関わることの重要性をさらに強く意識します。

(担当：家政学科 吉田加代子)